

THE BASICS OF ART EDUCATION
美術科教育の基礎



監修

福田隆眞

福本謹一

編集

東良雅人

村上尚徳

山田芳明

建帛社
KENPAKUSHA

監修

福田 隆真 山口大学名誉教授
福本 謹一 兵庫教育大学名誉教授

編集

東良 雅人 京都市立芸術大学客員教授
村上 尚徳 元環太平洋大学副学長
山田 芳明 鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授

執筆者 (五十音順)

赤木里香子	岡山大学教育学域教授	佐野真知子	播磨高原広域事務組合立播磨高原東中学校教諭
浅海 真弓	兵庫教育大学学校教育学部教授	竹内 晋平	奈良教育大学教育学部教授
足立 直之	山口大学教育学部准教授	徳 雅美	カリフォルニア州立大学チコ校教授
池内麻依子	造形作家	直江 俊雄	筑波大学芸術系教授
稲垣 修一	愛知教育大学附属岡崎小学校教諭	長尾 菊絵	東京都国立市立国立第二中学校教諭
宇田 秀士	奈良教育大学教育学部教授	中野 良寿	山口大学教育学部教授
遠藤 敏明	秋田大学教育文化学部教授	中村 和世	広島大学大学院人間社会科学研究科教授
大坪 圭輔	武蔵野美術大学教授	西尾 正寛	畿央大学教育学部教授
岡田三千代	鳴門教育大学附属小学校教諭	畑山 未央	植草学園大学発達教育学部助教
尾澤 勇	秋田公立美術大学美術学部教授	蜂谷 昌之	広島大学大学院人間社会科学研究科准教授
金子 一夫	茨城大学名誉教授	針貝 綾	名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授
川真田 心	鳴門教育大学附属小学校教諭	ふじえみつる	愛知教育大学名誉教授
金香美	淑明女子大学校准教授	藤吉 祐子	国立国際美術館主任研究員
清永 修全	東亜大学芸術学部教授	古家 美和	兵庫教育大学附属小学校教諭
小池 研二	横浜国立大学教育学部教授	前芝 武史	兵庫教育大学学校教育学部教授
小崎 真	愛知県豊明市立豊明小学校教諭	宮川 紀宏	京都華頂大学現代家政学部准教授
後藤 雅宣	千葉大学名誉教授	柳 奈保子	元兵庫県姫路市立小学校主幹教諭
佐々木 幸	北海道教育大学教育学部釧路校教授	山木 朝彦	鳴門教育大学客員教授
佐々木敏幸	明星大学教育学部助教	山本 政幸	岐阜大学教育学部教授
佐藤 賢司	大阪教育大学教育学部教授	結城 孝雄	東京家政大学児童学部教授
佐藤 真帆	千葉大学教育学部准教授		

(所属・職位等は、2023年11月現在)

まえがき

この度、『美術科教育の基礎』を出版する運びとなり、感慨深い思いが去来しています。本書は、1985年(昭和60年)7月に出版された『美術科教育の基礎知識』を藍本として内容を継承しています。その初版が刊行された当時は、現職教員の研修・研究を目的とした新教育大学や全国の国立大学の教育学部に教育学研究科の設置が進められてきたばかりの頃で、美術教員を目指す学部学生や現職教員の初任者を主な対象に「美術科教育」とは何なのか、その理論や実践に関する知見を網羅し、美術教育の全体像を俯瞰するような書籍の刊行が強く求められた時期でした。その意味で、『美術科教育の基礎知識』は極めてタイムリーな出版であったと自負しています。内容記述にあたっては、読みやすさを考慮してQ&A形式を採用し、美術科教育の目的、理論と歴史、諸外国の理論、発達理論などを包括し、領域と内容についても造形遊び、絵や立体、構成・デザイン・工作・工芸・映像・メディア、鑑賞の各実践方法や教材等について数多くの専門家に執筆を依頼しました。

その後、学習指導要領の改訂時や時代の要請に合わせて、1991年(平成3年)、2000年(平成12年)、2010年(平成22年)の改訂をしてきましたが、まさに昭和、平成、令和を通して、美術科教育の啓蒙に微力ながら尽力してきたつもりです。今回、更なる改訂に臨むにあたり、企画・編集の新たな担当者として文部科学省の視学官、教科調査官等を歴任した東良雅人並びに村上尚徳、そして鳴門教育大学から山田芳明を迎えて、『美術科教育の基礎』として生まれ変わることになりました。本書の題名について前回までの「基礎知識」ではなく「基礎」としたことは、美術科教育が知識のみならず、人間陶冶の一環として目指す、直観や感覚、想像力を研ぎ澄まし、図像やイメージに関する洞察力を育むことを見据えたことによるものです。

現代は知識基盤社会の到来と相まって生成AIなどに見られる情報駆動型社会が日常化しつつあると言われますが、同時にVUCAな(不透明で不確かな)時代状況も招いている中で、美術教育の重要性はますます高まっているように思われます。収束的な認知傾向が強まる一方で、感性や感覚に基づく拡散的な思考や柔軟な態度形成が不可欠となり、そのために美術教育の位置づけがより強化される必要があるのではないのでしょうか。本書がそうしたパースペクティブを読み解き、美術教育の未来を築くための一助となれば幸いです。

今後、読者の皆様から多様なご意見や提案をいただき、よりよい書となることを期待していますので、皆様のご忌憚のないご意見をお待ちしています。

最後になりましたが、建帛社会長の筑紫恒男様には、40年にわたる美術科教育の出版のご尽力をいただき、あらためて感謝の念に堪えません。そして編集担当の青柳哲悟さんには最初から最後まで、細かいところまでご対応をいただき、心より感謝しています。

2023年(令和5年)12月

監修者 福田隆眞・福本謹一

第1章 美術教育とは何か

1

1-1	美術教育の目的と現代的課題	2
1	美術教育の意味と展望	2
2	感性教育・情操教育	4
3	自己表現と伝達	5
4	視覚言語と美術教育	6
5	美術教育研究の課題と展望	7
6	美術教育のリサーチメソッド	9
1-2	日本の美術教育理論と歴史	13
7	日本の美術教育理論	13
8	図画教育の始まりと発展	15
9	鉛筆画・毛筆画論争	17
10	新定画帖	18
11	自由画教育	19
12	自由画教育とその後	20
13	構成教育	21
14	工作教育の歴史	22
15	戦後の民間美術教育運動	24
1-3	外国の美術教育理論と歴史	26
16	ロシア法とネース・システム	26
17	モリス, アール・ヌーヴォー, ドイツ工作連盟	28
18	チゼック	30
19	ドイツ芸術運動	31
20	バウハウス	32
21	ハーバート・リード	34
22	アイスナー	36
23	ビジュアル・カルチャー	37
1-4	外国の美術教育	38
24	ヨーロッパの美術教育 イギリス	38
25	ヨーロッパの美術教育 ドイツ	39
26	ヨーロッパの美術教育 フランス	40
27	ヨーロッパの美術教育 フィンランド	41
28	ヨーロッパの美術教育 ビジュアル・コンピテンシー美術教育	42
29	アメリカの美術教育	43

30	東アジアの美術教育	45
31	東南アジアの美術教育	47
32	国際バカロレア	49
33	世界の美術教育の課題と展望 InSEA	50
1-5	造形表現の発達と類型	51
34	児童画研究の歴史	51
35	描画表現の発達	54
36	ローウェンフェルド	56
37	アルンハイム	57
38	ケロッグ	58

第2章 美術科教育の学習指導 59

2-1	学習指導要領	60
39	学習指導要領の変遷（1）	60
40	学習指導要領の変遷（2）	62
41	学習指導要領の変遷（3）	64
42	学習指導要領の変遷（4）	66
43	学習指導要領の変遷（5）	68
44	主体的・対話的で深い学び	69
45	主題の追求	70
46	日本の伝統や文化の重視	71
47	造形的な視点	72
48	観点別学習状況の評価と、指導と評価の一体化	73
2-2	教育課程と授業	74
49	コンピテンシーに依拠した教育課程の編成の背景	74
50	個別最適な学びと協働的な学び	76
51	教材研究・授業研究の方法	78
52	年間指導計画の立て方	80
53	指導の実質化に向けた指導案の書き方	81
54	特別支援教育	83
55	STEAM教育	84
56	教科横断的学びと美術教育	86
57	創造的問題解決学習とポートフォリオ評価	88
58	美術教育の法則化	89
59	美術の苦手な子の指導	90
60	児童画作品展の課題と展望	91
61	図工展・校内展示, 野外造形展・屋外展示の意義	92

3-1 造形遊び	96
62 造形遊びの目的と内容	96
63 授業における造形遊びの展開	98
64 現代美術と造形遊び	101
65 造形遊びの評価	102
3-2 絵・立体・彫刻	103
66 小・中学校の絵や立体・彫刻の教材	103
67 絵画	104
68 ドローイング	106
69 ペインティング	108
70 遠近法	110
71 小学校の絵	111
72 中学校の絵	113
73 版画の種類と技法	115
74 墨絵・水墨画	119
75 立体・彫刻	120
76 粘土遊び	122
77 小学校の立体 粘土	123
78 小学校の立体 身近な材料	124
79 小学校の絵や立体の評価	125
80 中学校の彫刻 塑造	126
81 中学校の彫刻 彫造	127
82 中学校の絵や彫刻の評価	128
3-3 工作・デザイン・工芸	129
83 デザイン・構成とは	129
84 工作・工芸とは	131
85 平面構成の原理	133
86 錯視図形	135
87 立体構成	136
88 色の原理	138
89 対比と同化	140
90 色彩の心理	141
91 配色について	142
92 小・中学校の工作 デザイン・工芸の教材	143
93 小学校の工作 伝えるもの・飾るもの・使うもの	144
94 小学校の工作 紙	145
95 小学校の工作 木	146
96 小学校の工作 動くもの	147

97	小学校の工作の評価	148
98	中学校のデザイン・工芸	149
99	モダンテクニック	150
100	視覚伝達デザイン ポスター	151
101	ユニバーサルデザイン	152
102	問題解決学習	153
103	中学校の工芸 木の工芸	154
104	中学校の工芸 焼き物	155
105	中学校の工芸 金属の工芸	156
106	中学校のデザイン・工芸の評価	157
3-4	映像メディア	158
107	映像メディアとビジュアル・リテラシー	158
108	プログラミング教育と図工	160
109	教育機器 教育情報ICTタブレット	162
110	写真表現の生かし方	163
3-5	鑑賞	164
111	美術鑑賞教育の目的・内容	164
112	鑑賞の観点	166
113	対話による鑑賞の実践	167
114	小学校の鑑賞 低学年	168
115	小学校の鑑賞 中学年	169
116	小学校の鑑賞 高学年	170
117	中学校の鑑賞	171
118	日本美術の鑑賞	172
119	西洋美術の鑑賞	173
120	アジアの美術の鑑賞	174
121	美術館との連携	175
122	現代美術の鑑賞法	177
123	鑑賞の評価	178

付 録

179

幼稚園教育要領, 学習指導要領リンク集	179
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料リンク集	180
参考資料・文献リスト	181

第1章

美術教育とは何か

教育は、その時々の社会情勢に大いに影響を受ける。近年は人工知能（AI）、ビッグデータ、モノのインターネット（IoT）等の技術的な発展に支えられた Society 5.0 時代と呼ばれる新たな未来社会を指向し急激に変化している。その一方で持続可能な社会の実現の必要性が認識され、そのための目標（SDGs；持続可能な開発目標）の達成が広く社会に求められている。

このような社会の変化と、それに伴って突きつけられる教育課題に対応していると、ともすれば足元、すなわち教育の根本となる考え方を見失うこともある。

そこで、本書の第1章では、「美術科教育」に先立ち、そもそも「美術教育とは何か」という根本に立ち返り、美術教育を考える基礎になる内容を取り扱う。内容的には学校教育と教員養成を主としながらも、広く一般に美術教育全体を理解できるように、美術教育の目的と課題、美術教育の特質、美術教育の理論と歴史、造形表現の発達等について述べている。また、美術教育の研究についても取り上げ、研究方法についても紹介している。美術教師として自身の実践を研究的な視点から考察し改善を図るための視点となるであろう。また、美術教育の理論と歴史においては、日本の美術教育はどのような考え方に基づいて行われてきたのか、そしてどのような経緯を経て現在に至っているのか、歴史の結節点となるような項目を取り上げ、簡略に理解できるようにした。さらに、外国の美術教育理論においては、日本の美術教育はもとより世界的に影響を与えた教育理論についてまとめている。外国の美術教育の思潮についても、日本への影響や関係のある項目を選択した。

本章を通して、美術教育の理念を確認するとともに、美術教育研究の基礎として頂ければ幸いである。

（山田芳明）

1

美術教育の意味と展望

美術教育の意味と展望について
教えてください

1. 美術と人間

現代において、私たちを取り巻く美術は多様に存在している。美術作品や工芸品などの実物だけでなく、情報技術の発達により視覚的環境が変化し、映像作品に急激な発展を及ぼしている。美術の特徴を大別すると、絵画や彫刻のように自由に心象を表現するものと、使用や伝達の目的を有したデザイン、工芸、建築などの機能表現あるいは適応表現と呼ばれるものがある。

わが国のように長い歴史を有していると、古くからの伝統的な美術が各所に見られる。神社仏閣の建築物及びそれらの所蔵品のように、歴史的な美術作品が存在している。また、現代の建築に居住して、おしゃれなデザインの製品や伝統的な工芸品に囲まれた生活をしている場合も多々ある。そうした現代の生活に、漫画やアニメーション、映像機器によるコミュニケーションなども溶け込んでいる。そのように考えると、私たちの生活においては伝統的な美術から現代的な美術までが共存しているのである。

2. 美術表現の変遷と広がり

このように美術作品は固有の伝統的なものから、グローバル化による国際的な特徴をもつもの、技術や文明の近代化によるもの、現代の最先端に位置するもの等、多種多様に見られる。また、20世紀にはデザインの分野が急速に世界中に広がり、機能美のように新しい美意識や審美観を美術の世界に展開してきた。同時に、美術が技法や技術による表現だけではなく、19世紀後半の印象派の写実による再現的表現方法の展開から、抽象や構成のような非再現的方法に

よる表現が広まってきたことにも、新しい展開が見られる。そして、このことで美術の表現に「創造力」が求められるようになったのである。

さらに20世紀後半には、情報化が進み、メッセージの発信や映像表現の発信などが日常化してきた。現代美術はこうしたグローバル化した世界にメッセージを発信することで、人と人の交流を豊かにし、美術表現に自由な考え方をもたらしている。

3. 美術の分類

美術の総体を空間軸で分類すると、心象表現と目的表現、美術と工芸、大芸術と小芸術などの区分をすることができる。それらは精神性を重視するか、実用性を極めるのかの違いでもある。表現の分野でいえば、絵画や彫刻が精神性の高い心象の表現となり、工芸や建築などが実用性を重視した審美観の表現を極めているといえる。20世紀に現れたデザインは実用性を極める過程の思考であり、機能と審美観を備えて、よりよい結果を想定した試行錯誤する造形活動であるといえる。

また美術を歴史の時間軸で考えると、地域や民族が固有に培ってきた伝統的美術があり、それを基盤として、近代化が進み、外部からの影響を受けた新たな美術の探究があった。日本でいえば、江戸時代までの鎖国によるわが国独自の美術の発展が存在し、開国によって西洋の影響を大きく受けたことで、西洋美術が受容され、同時に、わが国の本来の美術を再認識した歴史的経緯がある。その後、西洋美術を消化吸収し、独自の展開をしたのである。

20世紀のデザインの普及は国際様式の広がりをもたらし、美術は地域や国を限定することなく、美術と人間の関わり、美術を媒介にした社会や世界との関わりに広がってきた。さらに、現代美術と呼ばれる分野では、社会や世界に発信するメッセージを美術によって表現している。世界の平和や環境、人権や政治などの社会的な問題を、美術作品そのもので表現したり、映像で表現したり、相互交流によってメッセー

ジの理解を深めたり、拡大したりしているのである。

4. 「美術の教育」と「美術による教育」

こうした状況で、美術の教育を考える場合、空間軸で捉えた美術の種類や分野と、時間軸で捉えた伝統美術から現代美術までの変遷の両者を総体として想定することができる。もちろんそのすべてを美術教育の対象とすることはできないが、総体として捉えた美術を踏まえて教材を抽出することで、美術を包括的に捉え、創造活動を促すことができるのである。

美術と教育の関わりには、厳密に考えると「美術の教育」と「美術による教育」に分けることができる。美術そのものの教育と、美術を通じてその機能や効果による教育とに分けることができる。

「美術の教育」は、美術表現のための技法や技術の伝授と習得が主となる。表現の目的や意味を問うたり内省したりする精神面での教育を伴うことで、表現の技術技法が高まっていくのである。美術の教育には、美術家・工芸家の工房での徒弟制度や画塾、スタジオ等、美術の専門家を育成するものがある。また、社会教育のカルチャーセンターなどの美術や工芸の教室での教育、美術館や博物館でのセミナーも、専門家の養成ではなくても、教養教育の中の「美術の教育」である。大学における教養の美術も、理論や実習による美術そのものの教育といえる。

このような美術の教育は美術そのものを教育内容の主とするが、そこには付帯的に人間の教育が含まれている。人が人に施す教育である限り、必ず人間性の教育がその是非を問わず含まれるのである。また、技術技法の教育といっても、手本を踏襲するだけではなく、自分なりの工夫や特色を表現するのである。

5. 学校教育での美術教育

「美術による教育」の主たるものは、学校教育である。特に幼稚園、小学校、中学校までの教育では、美術を媒介とした、人間性とコンピ

テンシーといわれる資質・能力の育成である。幼稚園での造形活動、小学校の図画工作科、中学校の美術科、高等学校での芸術科は、美術の活動を通して、よりよい人間になるための教育であり、美術の能力、美術の特色を修得することにより、多様な資質・能力を育成することである。

小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科に通底する目標は、表現と鑑賞の活動を通して、感性を働かせ、美術を愛好し、造形的な創造活動に喜びを味わい、美術文化の理解を深めることにある。

美術による教育は、その特徴である創造的な活動を行い、美術文化の形成につながる資質・能力を育成するのである。20世紀以降の美術の創造的な活動とグローバル化した国際社会に直面して、国際的な文化と独自文化の形成へとつながっているのである。

6. 美術教育の展望

このように美術の教育と美術による教育を考えると、それらは別物ではなく、美術の教育の延長上に美術による教育が存在しているのである。目の前の教材や題材は美術の教育であるが、それを実践する過程で、技術技法だけでなく、発想や構想を生み出し、予期せぬ展開をもたらすこともある。美術による創造性の育成は、STEAM教育（科学、技術、工学、芸術、数学の融合教育）のように自然科学の分野とも融合して、新たな分野や資質の育成に寄与することができる。美術による造形的な創造性が、より広範な創造性の育成につながる可能性がある。

また、美術文化を理解し参画することで、新たな文化の形成に寄与することができる。漫画やアニメ、オブジェや映像などはわが国の新しい文化を生み出してきた。日本文化の特色の「わびさび」に並んで「かわいい」なども美術文化の要素となってきた。グローバル化した文化と独自文化の総体を形成するために、美術教育の役割はその発展の可能性を有している。

(福田隆真)

2

感性教育・情操教育

感性や情操の教育としての
美術教育について教えてください

1. 美術教育における「感性」と「情操」

「感性」は「物事を心に深く感じ取る働き」とされ、「情操」は「美しいもの、すぐれたものに接して感動する情感豊かな心」などとされている。「感性」や「情操」という言葉は、様々な分野で用いられており、その場によって意味も違って使われている。そのため、ここでは学校美術教育における「感性」や「情操」について述べることに限定する。

現行の学習指導要領（平成29（2017）年）では、図画工作科、美術科における「感性」及び「情操」は、「（3）学びに向かう力、人間性等」に関する目標に位置付けられている。小学校図画工作科では、「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う」と記され、中学校美術科でもおよそ同様の内容が示されている。ここでは「感性」を豊かにしていくことが「情操」を培うことにもつながり、両者は相互に働きながら育成され、豊かな人間性等をはぐくむとされている。

教科目標における「感性」は、中学校美術科では平成10（1998）年版学習指導要領から、小学校図画工作科では平成20（2008）年版から示されるようになった。現行の小学校図画工作科及び中学校美術科の学習指導要領解説（以下、図画工作・美術科解説）では、「感性とは、様々な対象や事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」とされている。

「情操」は、昭和22（1947）年の学習指導要領試案以来、図画工作科や美術科の教科目標に一貫して示されてきた。現行の図画工作・美術

科解説では、「情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心」とされている。

2. 「感性」及び「情操」の育成

「感性」をはぐくむためには、ただ絵を描かせたり鑑賞させたりするだけでなく、表現や鑑賞の活動の中で心を働かせながら、見方や視点を広げるような取り組みが重要である。例えば、色の違いや美しさ、部分として見たときの形の面白さや不思議さ、塊としての量感、空間としての広がり、全体的な印象など、様々な視点で捉えさせ、日ごろ気付かなかった新たな見方や感じ方を体験させていくような指導が必要である。これは表現や鑑賞の活動の中で、造形的な視点を豊かにするための〔共通事項〕を位置付けて指導することでもあり、造形を捉えるアンテナを増やしていくことが、「感性」を豊かにすることにつながると考えられる。

「情操」を培うためには、よさや美しさなどを感じ取る「感性」と、それらを大切な価値として求めていこうとする心を育てていくことが重要である。そのためには学習活動の中で、自分の見方や考え方を大切にしながらよさや美しさを豊かに感じ取る活動や、自分らしさを発揮しながら感じ取ったことなどを基に、よりよいもの、美しいものを目指して作品をつくり出すこと、またそれを他者に共感されることで喜びを感じ、さらによりもの、美しいものを表現していこうとする意欲につながっていくものである。

「感性」や「情操」は、美術や芸術のみで育成されるものではないが、図画工作科や美術科では、教科の目標としてその育成を目指している。そのため、単に描いたりつくったりするなどの美術の活動をすれば「感性」や「情操」が育成されるという捉え方ではなく、具体的にどのような活動を通して育成するのか、教育の手法として指導者は考えることが大切である。

（村上尚徳）